カモシレナイとニチガイナイの異質性

杉村　　泰

キーワード　*モダリティ、蓋然性、推量、カモシレナイ、ニチガイナイ*

1．はじめに

一般に「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は「蓋然性」(事態の成立する可能性の度合い）の高さという「量的」な違いによって対立するとされている。これに対し、本稿では両者の違いは「認識」と「推量判断」という「質的」な違いにあることを明らかにする。

1.1　「認識」と「推量判断」

はじめに議論の前提として「認識」と「推量判断」の違いについて説明する。本稿でいう「認識」とは話し手がある事態の成立を見たままに捉えたり、記憶のままに捉えることを指す。たとえば、ある人物の性別について見たままに「男だ」とか「女ではない」と捉えるのが「認識」である。一方、「推量判断」とは認識が不確定の場合に話し手の推論によって一つの帰結を導き出すことを指す。たとえば、ある人物の性別が不明な場合に、推論によって「男のようだ」とか「女らしい」と捉えるのが「推量判断」である。これらはまず「事態」があり、次に事態に対する「認識」があり、認識が不確定の場合に「推量判断」が行なわれるという関係にある（図１）。

事態 → 認識 → 推量判断

図１　認識と推量判断

1.2　「事態確定性」と「認識確定性」

次に「事態確定性」と「認識確定性」の違いについて説明する。本研究でいう「事態確定性」とは客体世界における事態成立の確実・不確実を捉える概念である。一つの事態の成立可能性のみを認める場合を「事態確定性が確実である」と言い、複数の事態の成立可能性を共に認める場合を「事態確定性が不確実である」と言う。一方、「認識確定性」とは話し手の認識の中で事態成立の確

定・不確定を捉える概念である。「事態確定性」が確実であるにしろ不確実であるにしろ発話時点においてそれが定まっている場合を「認識確定性が確定である」と言い、定まっていない場合を「認識確定性が不確定である」と言う。

たとえば、今度生まれる赤ちゃんの性別について「検査の結果男だ」とか「検査の結果男ではない」のように断定的に言うのが「事態確定性」の「確実」であり、「赤ちゃんの性別は天が決めるもので、男かもしれないし女かもしれない。どちらの可能性もある」のように複数の可能性が共存することを述べるのが「事態確定性」の「不確実」である。ここで注意したいのは、これらの表現は赤ちゃんの性別について一つの可能性のみを述べるか複数の可能性を述べるかという点で違いはあるものの、そうした認識を話し手の推論を経ずに述べているという点では同じである。いずれも発話時点において話し手の事態に対する認識が一つあるいは複数に定まっているため「認識確定性」は「確定」となる。一方、赤ちゃんの性別について推論して「きっと今度は男だ」、「どうやら男かもしれない」、「どうも男のようだ」などと述べる場合は、発話時点において話し手の事態に対する認識が定まっていないため「認識確定性」は「不確定」となる。

1.3 「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」

従来、一般に「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表し、「ニチガイナイ」は蓋然性の高いことを表すとされてきた（仁田1991、野田1984、森山1989、益岡1991、宮崎1992、中畠1993、森本1994、劉1996、安達1997）。この説に従うと、例文（１ａ）は死ぬ可能性が低いことを表し、例文（１ｂ）は死ぬ可能性が高いことを表すということになる。

(1) a．この人は明日死ぬカモシレナイ。
　　b．この人は明日死ぬニチガイナイ。

しかし、もし「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が単に蓋然性の高さの違いによって対立しているのであれば、例文（２ａ）よりも蓋然性の高い場面で例文（２ｂ）のように言うことができるはずである。しかし、それができないということは、両者は単なる蓋然性の違いによって対立しているのではないことを示している。

(2) a．この人は明日死ぬカモシレナイというのにいまだ創作意欲がある。
　　b．*この人は明日死ぬニチガイナイというのにいまだ創作意欲がある。

以下、本稿では「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると「認識」したことを表し、「ニチガイナイ」は当該の事態の成立が確実であると「推量判断」したことを表すということを主張する。「カモシレナイ」と量的な違いによって対立するのは、当該の事態の成立が確実であると「認識」したことを表す「ダ/φ」である。[1]

2.「蓋然性」の高低と「可能性の分散」の有無

本節では「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」を「量的」な違いとして捉える一般説（「蓋然性」の高低）および木下説（「可能性の分散」の有無）を否定し、推論過程を経るかどうかといった「質的」な違いとして捉える必要があることを指摘する。

一般に「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表し、「ニチガイナイ」は蓋然性の高いことを表すとされている。これに対し、木下（1999）は両者の違いは可能性の分散の有無にあるとした。

カモシレナイ：「推論」の帰結の中に、唯一際立って「可能性」が高い（低い）ものがない（「可能性」が分散している）

ニチガイナイ：「推論」の帰結の中に、唯一際立って「可能性」が高いものがある

両説を比較すると木下の説方がすぐれていると言える。その理由は、蓋然性の高低による説明では、何を基準に蓋然性の高低を決めるのかが不明確だからである。たとえば、例文（３ａ）と例文（３ｂ）を比べると、前者では雨の降る蓋然性が非常に低いものと捉えられているのに対し、後者ではむしろ雨の降る方に判断が傾いている。それにもかかわらず、ともに「カモシレナイ」が使われているということは、蓋然性の高低による説明には限界のあることを示している。

(3) a．まず降らないと思うけど、万が一雨が降るカモシレナイから傘を持っていこう。

---

[1] 「ダ」と「φ」は交替形の関係にある。「ダ」が名詞や形容動詞型活用の語につくのに対し、「φ」は動詞型活用の語や形容詞型活用の語につく。

b．この雲行きだとかなりの確率で雨が降るカモシレナイから傘を持っていこう。

一方、木下の説明は「推論」の帰結の中に唯一際立って可能性の高いものがあれば「ニチガイナイ」、それがなければ「カモシレナイ」というように使い分けの基準が明確である。これに従えば、例文（３ａ）と例文（３ｂ）はいずれも雨の降る可能性を唯一際立って高いものとは考えていないため「カモシレナイ」が使われていると説明することができる。

木下は自説を裏付ける証拠として、複数の矛盾対立する事態の成立可能性がともに高いことを「ニチガイナイ」によって表すことができないことを指摘している。事実、例文（４ａ）のように言うことはできるが、例文（４ｂ）のように言うことはできない。

(4) a．容疑者はまだ絞り込めていない。アリバイのないＡ氏の犯行である可能性も高いし、強い犯行動機を持つＢ氏がやった可能性も高い。（木下1999）

b．*容疑者はまだ絞り込めていない。アリバイのないＡ氏の犯行であるニチガイナイし、強い犯行動機を持つＢ氏がやったニチガイナイ。（木下1999）

これに対し、（４ａ）の場面で「カモシレナイ」なら例文（５）のように言える。このとき、「カモシレナイ」は決して蓋然性の低いことを表しているわけではない。

(5) 容疑者はまだ絞り込めていない。アリバイのないＡ氏の犯行であるカモシレナイし、強い犯行動機を持つＢ氏がやったカモシレナイ。

以上のことから、両者の違いを蓋然性の高低ではなく、可能性の分散の有無に求める木下説の方がすぐれていると考えられる。

ところが、木下説にも依然として問題は残っている。たしかに、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の違いには可能性の分散の「有無」が関与していると言えよう。しかし、両者がともに推論の帰結を表すと考えるのは問題である。なぜならば、例文（６）のように推論の帰結を表す文脈では両者とも使えるが、例文（７）のように一般的事実を述べる文脈では許容度に違いが生じるためである。

(6)（話し手の頭の中で宝くじが当たるかどうかを推論して）
　a．宝くじは当たらないカモシレナイ。
　b．宝くじは当たらないニチガイナイ。
(7) 一般的に宝くじというものは当たるものですか。
　a．――宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。
　b．*――宝くじというものは当たらないニチガイナイものだ。

一般的事実は発話時点においてすでに話し手の頭の中に知識として備わっているものであり、発話時点で新たに推論によって導き出されたものではない。したがって、例文（7 a）が成立するということは、「カモシレナイ」が推論過程を経ない場面にも使われることを示している。

一般説と同様に、木下説でも「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」を質的には同じのものと捉えている。しかし、上の事実からも明らかなように、両者は単なる量的な違いではなく、推論過程を経るかどうかといった質的な違いとして捉える必要があることを指摘する。[1]

3．両者の異質性を示す証拠

「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の異質性は、①一般的事実を述べることができるかどうか、②連体修飾成分となるかどうか、③想起文に使えるかどうか、④伝聞文に使えるかどうかという違いから証明できる。いずれの場合にも、「カモシレナイ」が自然に使えるのに対し、「ニチガイナイ」はそれができ

---

[1] 三宅（1992、1993）は、「カモシレナイ」を「可能性判断」、「ニチガイナイ」を「確信的判断」のように、異なるものとして分類している。
　「可能性判断」：命題が真である可能性があると認識する。（三宅1992：38）
　「確信的判断」：命題が真であると確信する。（三宅1993：38）
ただし、三宅が両者を「認識的モダリティ」（本研究の「真偽判断のモダリティ」に相当）の範疇で捉えているのに対し、本研究では「カモシレナイ」は「命題」と「モダリティ」の二つの性質を合わせ持つと捉えている点で違いがある。
　また、小林（1980：8）は、「〔～かもしれない〕はある事柄のフィフティー、フィフティーの可能性を（中略）述べたもので推量表現とは見なしがたく本論ではこれらを除外して考える」としている。しかし、「カモシレナイ」は必ずしもフィフティー、フィフティーの可能性を述べるわけではないこと、推量のモードゥスから除外した後の位置付けがなされていないことから、なお検討の余地が残されている。

ないという違いが見られる。

3.1 一般的事実

木下（1999：19）は、推論を「一つ以上の根拠から帰結を導くこと」と定義し、「本稿は、真偽についての判断には、「推論」過程があると仮定する」と主張した。木下は次の文で「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」が使えない理由を、「これらの形式が、「推論」の結果ただ一つの帰結が導かれたことを表わすことによると考えられる」（木下1999：85）と説明している。たしかに、「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」は、推論の結果ただ一つの帰結が導かれたことを表すと言える。

(8) a．泊まるかもしれないし泊まらないかもしれない。どっちにしても相当遅くなる。（三宅1992：山田太一『丘の上の向日葵』）
b．*泊まるニチガイナイし泊まらないニチガイナイ。どっちにしても相当遅くなる。（木下1999）
c．*泊まるヨウダし、泊まらないヨウダ。（木下1999）
d．*泊まるラシイし、泊まらないラシイ。（木下1999）

問題は、はたして例文（８ａ）に推論過程があるのかどうかということである。この表現は例文（９ａ）のように未知推量を表す文脈に使われることもある。しかし、例文（９ｂ）のように既定の事実を述べただけの文脈に使われる場合もある。

(9) a．今日、お父さん家に帰ってくるかしら。
——そうね、泊まるカモシレナイし泊まらないカモシレナイわね。
b．今日の予定はどうなってるの。
——泊まるカモシレナイし泊まらないカモシレナイ。その時の都合ということになってるの。

例文（９ｂ）の場合、発話時点において推量判断を行なっているわけではなく、単に複数の事態の成立可能性がともにあることを述べているにすぎない。したがって、推論過程は経ていないことになる。このことから、例文（９ａ）でも「カモシレナイ」自体は複数の事態の成立可能性が共存することを述べているにすぎず、推量判断の意味は未知推量をするという文脈に帰せられると考えられる。

同様に、例文（10）も発話時点において推量判断を下したものではなく、量子力学における一般的真理として、複数の可能性が共存することを述べているにすぎない。

(10)経路全体を考えれば、複雑さはさらに広がる。電子は、たとえばAから出発してまっすぐにOまで来たのかもしれないし、ぐるっとまわり道をしてOにたどりついたのかもしれない。これらすべての可能性を加えてはじめて、現在電子がOにある状態の共存度が計算できるのである。(和田純夫『量子力学が語る世界像』)

以上のように「カモシレナイ」は一般的事実を述べる文脈に使えるが、「ニチガイナイ」はそれができないという違いがある。

3.2 連体修飾成分

次に、連体修飾成分となる場合について考察する。三原（1995）は、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の連体修飾について次のように記述している。

カモシレナイとニチガイナイは共に連体修飾節中に生起可能なようである。

(6) a．犯人が立ち寄るかもしれない店
　　b．倒産するかもしれない会社
(7) a．犯人が立ち寄るに違いない店
　　b．倒産するに違いない会社

ただし（7a、b）については、文法的観点から言えば適格であるかもしれないが、文体的には完全であるとは言いにくい。注意深く推敲しながら文章を書く場合、例えば「きっと犯人が立ち寄ると思われる店」などのようにするのではないかと思われるからである。(三原1995：288)

三原の記述は本稿の日本語の直観とも合うものである。次の例文のように、「カモシレナイ」は自然に連体修飾成分となるが、「ニチガイナイ」は不自然である。例文（11b）は「雨が降るニチガイナイと思われる空模様だ」の「と思われる」が省略されたものとしてなら解釈できるが、そうでなければ不自然である。

(11) a．雨が降るカモシレナイ空模様だ。

b. ?雨が降るニチガイナイ空模様だ。

一般に「ニチガイナイ」は連体修飾成分となるとされている。[1] しかし、それは「～ニチガイナイと思われる〔名詞〕」の「と思われる」が省略された表現であると考えられる。一方、「カモシレナイ」はたしかに次のように「と思われる」の想定を必要とする場合もある。

(12)大泉さんは「ドナーさえ見つかれば助かるかもしれない多くの命のために、少しでもお役に」と、公演や『孫』の収益の一部を骨髄バンクに寄付している（『中日新聞』「中日春秋」1999.12.25 朝刊）

しかし、次のように「と思われる」の想定を必要としない場合もある。

(13)殊にバクテリアなどは先頃まで度々分類学者が動物の中へ入れたんだ。今はまあ植物の中へ入れてあるがそれはほんのはずみなのだ。そんな曖昧な動物かも知れないものは勿論仁慈に富めるビジテリアン諸氏は食べたり殺したりしないだろう。（宮沢賢治『ビジテリアン大祭』）

(14)しかし、内藤はリングの上で獣になることのできないタイプのボクサーだった。それはボクサーとして致命的な欠陥になるかもしれない弱点だった。（沢木耕太郎『一瞬の夏』）

(15)下の金庫には、重要書類と相当額の金とが納めてあり、火の中を無理に取りに行こうと思えば、行けるかも知れない情況であった（後略）（阿川弘之『山本五十六』）

これらは「動物であるもの」、「致命的な欠陥になる弱点」、「行ける情況」が連体修飾するのと平行した現象である。これに対し、「ニチガイナイ」の場合は、「と思われる」の想定なしに「動物ニチガイナイもの」、「致命的な欠陥になるニチガイナイ弱点」、「行けるニチガイナイ情況」と言うのは不自然である。

こうした違いは、「カモシレナイ」が一般的事実を表す文脈において明確に現れる。

(16)一般的に宝くじというものは当たるものですか。

[1] 森山（1989：62）には「行くに違いない人 cf. ??行くだろう人」、増岡（1991：115）には、「彼がリツに話すに違いないことは、よく承知していた。」という例が挙げられている。

a．――宝くじというものは当たらないものだ。
b．――宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。
c．*――宝くじというものは当たらないニチガイナイものだ。

以上のように「カモシレナイ」は連体修飾成分となるが、「ニチガイナイ」は連体修飾成分とならないという違いがある。

3.3　想起文

次に、想起文における違いについて考察する。ここでいう想起文とは推論過程を経ずに話し手の過去の記憶を辿って事態の真偽を述べるものを指す。(過去の記憶に基づいて推論する場合は推量文と考える。) 想起文において「カモシレナイ」は自然に使えるが、「ニチガイナイ」は使いにくい。

(17) a．私は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたカモシレナイが、記憶には残っていない。
b．*私は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたニチガイナイが、記憶には残っていない。

こうした文において「カモシレナイ」が使えるということは、これが推量判断を表す形式ではないことを示している。一方、こうした文に「ニチガイナイ」が使えないのは推量判断を表すためであると考えられる。

次のように他者のことを述べる場合には「ニチガイナイ」も使える。しかし、この場合は発話時点において他者の過去の事態を推量判断しているのであり、想起文ではなく推量文となる。

(18) a．あの人は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたカモシレナイが、記憶には残っていない。
b．あの人は子供のころ外で遊んだことはなかった。たまには散歩でもしたニチガイナイが、記憶には残っていない。

以上のように想起文において「カモシレナイ」は使えるが、「ニチガイナイ」は使えないという違いがある。

3.4 伝聞文

最後に、他からの情報を伝達する伝聞文において、「カモシレナイ」は伝聞の対象となるが、「ニチガイナイ」は伝聞の対象とはならないことを指摘する。

(19) a．雨が降るカモシレナイそうだ。
　　b．?雨が降るニチガイナイそうだ。

この点について、仁田（1991：61）は、「「～するかもしれないそうだ」に比べて、「～するにちがいないそうだ」は容認可能性がかなり落ちるものと思われる。「～ニチガイナイ」は、「～カモシレナイ」に比べて第三者の心的態度の表現になることは難しい」と論じている。第三者の心的態度というのは本稿の立場では命題となる。こうした事実から「カモシレナイ」は客観的な用法をもつため伝聞の対象となり、「ニチガイナイ」は客観的な用法をもたないため伝聞の対象とならないと考える。

一般に「カモシレナイ」はモダリティを表すとされている。しかし、本稿では「カモシレナイ」は「カモシレナイ$_P$-ϕ_M」と分析され、命題を表す「カモシレナイ$_P$」の部分とモダリティを表す「-ϕ_M」の部分からなると考える。これと平行して考えると、例文（19 a）は「雨が降るカモシレナイ$_P$-そうだ$_M$」と分析され、伝聞のモダリティ「～ソウダ」の中に「雨が降るカモシレナイ」という命題の埋め込まれた文であるということになる。つまり、例文（19 a）の「カモシレナイ」は命題に属すものであると考えられるのである。一方、「ニチガイナイ」が伝聞の対象とならないのは、形式全体がモダリティを表すためであると考えられる。

以上、本節では「カモシレナイ」が「発話時点における話し手の心的態度」というモダリティの条件から逸脱し、一般的事実を表すなど客観的な性質を示すことを指摘した。

4．「カモシレナイ」と「ダ/φ」の同質性

一般に「カモシレナイ」と対をなすのは「ニチガイナイ」であるとされているが、本稿では「カモシレナイ」と対をなすのは「ダ/ϕ」であると考える。それは「ダ/ϕ」と「カモシレナイ」の対立が、認識における事態成立の確実・不確実という同質の範疇の中での対立となっているためである。以下、「ダ/ϕ」は他の事態の成立可能性を認めず、当該の事態の成立が確実であると認識した

ことを表し、「カモシレナイ」は他の事態の成立可能性を認め、当該の事態の成立が不確実であると認識したことを表すことを明らかにする。

例文（20ａ）は推論過程を経ず単に複数の事態の成立可能性が共存することを述べた文である。こうした推論過程を経ない文脈において「カモシレナイ」を「ダ/φ」に置き換えても文は成立する。しかし、推量の意味を読みとらずに「ニチガイナイ」で置き換えるのは不自然である。もし、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が単に蓋然性の高さや可能性の分布の違いによって対立しているならば、「ニチガイナイ」との置き換えも可能なはずである。

(20) ａ．死を前にして、助かる方法があるかもしれないってのになにもしねえ奴は人間のクズだ。（鈴木光司『リング』）
　　ｂ．死を前にして、助かる方法があるってのになにもしねえ奴は人間のクズだ。
　　ｃ．?死を前にして、助かる方法があるニチガイナイってのになにもしねえ奴は人間のクズだ。

また、例文（21ａ）（22ａ）も推論過程を経ておらず、上と同様に「ダ/φ」に置き換えても文は成立する。この場合、推量の意味を読みとらずに「ニチガイナイ」で置き換えることもできる。しかし、この「ニチガイナイ」は「間違い無い」の意味の「に＋違い＋ない」であり、モダリティ形式の「ニチガイナイ」ではないことに注意したい。その証拠に「借家、借地に違いは無い」、「悪いことはかさなるものに違いは無い」のように助詞「は」で取り立てることができる。

(21) ａ．不動産の場合、この土地は自分の物だと言ったところで、そうだと断定する根拠が明確でない。塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地かもしれない。したがって、家や土地を手に入れたら、かならず登記しておく必要があるのだ。（相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる！』）
　　ｂ．塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地ダ。
　　ｃ．塀で囲い、家を建てて住んでいても、借家、借地ニチガイナイ。
(22) ａ．「これはみんな過ぎていくことなのよ。悪いことはかさなるものかもしれないけど、いつかは終ることなのよ。永遠につづくことじゃないわ」（村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（下）』）

b．「これはみんな過ぎていくことなのよ。悪いことはかさなるものダけど、いつかは終ることなのよ。永遠につづくことじゃないわ」

c．「これはみんな過ぎていくことなのよ。悪いことはかさなるものニチガイナイけど、いつかは終ることなのよ。永遠につづくことじゃないわ」

これらの文において「カモシレナイ」は複数の事態の共存を認め、「ダ/φ」はそれを認めないという違いがある。しかし、両者はそうした事態成立の確実・不確実を推量判断を加えずに述べている点では共通している。一方、「ニチガイナイ」は推量判断を表すためこうした文脈では使えない。こうした事実から、「カモシレナイ」と対をなすのは「ニチガイナイ」ではなく「ダ/φ」であることが分かる。

ところで、「カモシレナイ」は、事態の成立を「ダ/φ」によって確言するのをためらう場合に婉曲的な言い回しとして使われることがある。

(23)女はどんな正直な女でも、その時心に持っている事を隠して、外の事を言うのを、男程苦にしはしない。そしてそう云う場合に詞数の多くなるのは、女としては余程正直なのだと云っても好いかも知れない。(森鴎外『雁』)

(24)今逃げて行った男――女かもしれないが――は、たぶん伸子がついウトウトとソファで眠り込んでいる間に入って来たのだろう。(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

例文（23）は、話し手の主張に確言するだけの自信がないため、そうでない可能性を残し婉曲的な表現にした例である。ここで話し手は自分の主張が不確実であると述べているだけであり、特に推量判断を加えているわけではない。例文（24）は、侵入者が「男」である確証がないため、「女」である可能性も残し婉曲的な表現にした例である。この場合も、特に侵入者の性別について推量判断を加えているわけではない。

以上の事実から、認識における事態成立の確実・不確実において、「ダ/φ」と「カモシレナイ」が対をなすことが分かる。すなわち、「ダ/φ」は当該の事態の成立が確実であると認識したことを表し、「カモシレナイ」は当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表すのである。

5．まとめ

以上の考察の結果、「ダ/φ」と「カモシレナイ」が話し手の認識を表すのに対し、「ニチガイナイ」は話し手の推量判断を表すことが明らかとなった。したがって、同質の範疇で「カモシレナイ」と対をなしているのは、「ニチガイナイ」ではなく「ダ/φ」であると結論することができる。

「ダ/φ」：当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す
「カモシレナイ」：当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す
「ニチガイナイ」：話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す

このことは、「カモシレナイ」が推量文以外にも使われるのに対し、「ニチガイナイ」は推量文にしか使われないことから証明される。「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、単に蓋然性の高低によって区別できるものではないのである。

一般に「カモシレナイ」が「ニチガイナイ」よりも蓋然性の低いことを表すとされているのは、「何々カモシレナイ」という表現の裏には「何々でないカモシレナイ」という暗示があるのに対し、「何々ニチガイナイ」という表現にはそうした暗示がないためである。

(25) a．この人は明日死ぬカモシレナイし、死なないカモシレナイ。
　　b．*この人は明日死ぬニチガイナイし、死なないニチガイナイ。

しかし、「カモシレナイ」は単に複数の事態の成立可能性がともに存在することを述べているにすぎず、蓋然性の低いことを述べる表現ではない。一方、「ニチガイナイ」推論の結果ある一つの帰結を導き出す表現であり、その事態の成立可能性を高いものと捉える表現である。そもそも「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は性質の異なる表現なのであり、単純に蓋然性の高さを比較することはできないのである。

参考文献

安達太郎（1997）「副詞が文末形式に与える影響」『広島女子大学国際文化学部紀要』新輯３ pp. 1-11
木下りか（1999）『文末における「真偽判断のモダリティ」形式の意味』名古屋大学博士学位論文
小林幸江（1980）「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』７ pp. 3-22
田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』６－５ pp. 37-48
中畠孝幸（1993）「確かさの度合い ―― カモシレナイ・ニチガイナイ ――」『三重大学日本語学文学』４ pp. 13-20
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
野田尚史（1984）「～にちがいない／～かもしれない/～はずだ」『日本語学』３-10 pp. 111-119
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
三原健一（1995）「慨言のムード表現と連体修飾語」仁田義雄編『複文の研究』pp. 285-307 くろしお出版
三宅知宏（1992）「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学編』26 pp. 35-47
――――（1993）「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61 pp. 36-46
宮崎和人（1992）「現代日本語の判定文について」『広島修大論集 人文編』32-２ pp. 35-63
森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』 pp. 57-74 くろしお出版
劉 婧（1996）『陳述副詞の研究 ――話し手の確信度を表す副詞を中心に――』名古屋大学修士学位論文

例文の出典

赤川次郎『女社長に乾杯！』新潮文庫の100冊／阿川弘之『山本五十六』新潮文庫の100冊／沢木耕太郎『一瞬の夏』新潮文庫の100冊／鈴木光司『リング』角川ホラー文庫／相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる！』知的生きかた文庫

（三笠書房）／宮沢賢治『ビジテリアン大祭』（『銀河鉄道の夜』より）新潮文庫の100冊／村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（下）』新潮文庫／森鴎外『雁』（『鴎外全集第八巻』より）岩波書店／和田純夫『量子力学が語る世界像』講談社ブルーバックス／『中日新聞』「中日春秋」1999．12．25朝刊／（新潮文庫の100冊はＣＤ-ＲＯＭ版）